飢餓対策ニュース　第299号　発行日2015年5月20日（毎月20日発行）定価15円

日本国際飢餓対策機構（Japan International Food for the Hungry：略して JIFH）は、イエス・キリストの精神に基づいて活動する非営利の民間海外協力団体（NGO）です。1981年に誕生して以来、世界の貧困・飢餓問題の解決のために、自立開発協力、教育支援、緊急援助、人財育成、海外スタッフ派遣、飢餓啓発などに活動を広げてきました。現在は、国際飢餓対策機構連合（Food for the Hungry International Federation）の一員として、20ヶ国60の協力団体とともに、アジア、アフリカ、中南米の開発途上国で、現地パートナーと協力しあって、「こころとからだの飢餓」に応える働きをしています。

亡くなった姉はここに、と説明する男性（ヌワコットで）

夏の海外キャンプ参加者募集中！

①フィリピン
ファシリテーター・トレーニングキャンプ
日程：7月29日㈬～8月7日㈮
費用：16万8千円（予定）募集人数：10名

②ボリビア　ワークキャンプ
日程：8月14日㈮～8月27日㈭
費用：33万9千円（予定）
最低催行人数：6名

問合せ・参加申込みは…
東京事務所 TEL：03(3518)0781へ
※①②とも東京・大阪発着となります。

おいしいセットでネパール支援

①レギュラーコーヒーモカブレンド200g㊏930円
②グリーンティー150g㊏760円
③アールグレーティー60g㊏670円
④トラディショナル ホットチョコレート（ココア）200g㊏650円

この季節アイスでもホットでもおいしくいただけます。
1セット毎に50円をネパール支援としてJIFHに寄付。
送料日本国内800円
合計3,810円を税込3,600円でお届け
※父の日プレゼント用はお知らせください。
ラッピングバッグでお届けします。

【お問合せ】　株式会社キングダムビジネス
〒540-0026 大阪市中央区内本町1-4-12NPOビル402
TEL：06-6755-4877　FAX：06-6755-4888

ネパール被災者を高校生が支援

“私たちも応援します”兵庫・広島で高校生が街頭募金

5月連休明けの7日、兵庫県立尼崎小田高校の普通科の看護医療・健康類型と国際探求学科の生徒約30人（㊦写真）が、JR尼崎駅周辺で募金活動をして、30万766円をネパール支援として寄付してくださいました。生徒さんたちは5月の連休中に、チラシや募金箱、横断幕を用意して街頭に立ちました。きっかけは高知の大学に通う卒業生が、地震に心を痛めるネパール人留学生のために募金集めをしたことが、小田高校の福田先生に伝えられ、それを聞いた生徒たちが「私たちも応援したい」と活動に発展しました。また17日にも、広島の星槎（せいさ）国際高校の生徒さんも街頭募金をしてくださいました。皆さんの応援を感謝いたします。

ハンガーゼロサポーターを大募集中!!
現在…393 4口

今すぐ▶▶▶各種支援のお申し込みができます!!

●まず右の必要事項に記入して、点線の枠部分を切り取りハガキに貼って、下記の大阪事務所宛に郵送、又はこの頁をコピーして、ファクシミリで申し込みください。確認のための必要書類等を送らせていただきます。
お電話でも申し込みできます。各事務所までおかけ下さい。

□ ハンガーゼロ・サポーターとして協力します。
毎月（　　）口　（1口1,000円）
□ チャイルド・サポーター（世界里親会）になりたいので説明書（申込書）を送ってください。
□ 海外スタッフ・サポーターとして協力します。
毎月（　　）口　（1口1,000円）
□ JIFHサポーターとして協力します。
毎月（　　）口　（1口500円）
□ 今回に限り（　　）円協力します。
□ 郵便自動引落し申込書を送って下さい。
□ その他の銀行自動引落し申込書を送って下さい。

フリガナ
氏名：　　男・女
〒
フリガナ
住所：
（電話）
▼申込日：　　年　月　日▼NL 299号

FAX・072-920-2155

ネパール募金は…郵便振替00170-9-68590（一財）日本国際飢餓対策機構「ネパール」と明記、又はウエブサイトから

■発行者　岩橋竜介
■発行所　一般財団法人　日本国際飢餓対策機構
ハンガーゼロで検索！
Webサイトアドレス　http://www.jifh.org/
eメールアドレス　general@jifh.org
フェイスブック　https://www.facebook.com/hungerzero
■募金方法　※各種方法で随時受付中、詳しくは電話やウエブサイトで
●郵便振替　00170-9-68590／日本国際飢餓対策機構
●他の金融機関からの自動振替●クレジット、デジタルコンビニ
今すぐ募金ができます！　銀行からの自動振替　ゆうちょ銀行　その他金融機関　クレジットカード決済　VISA　コンビニ店頭で現金振込　ファミリーマート　FamilyMart　サークルK　サンクス　LAWSON
かざして募金

毎月、飢餓対策ニュースを皆様にお届けするために、ひばり障害者作業所（八尾市）、生活愛、関西地区のボランティアの皆様が発送作業のご協力をして下さっています。

大阪　〒581-0032 八尾市弓削町3-74-1
TEL(072)920-2225　FAX(072)920-2155
東京　〒101-0062 千代田区神田駿河台2-1 OCCビル517号室
TEL(03)3518-0781　FAX(03)3518-0782
東北　〒980-0012 仙台市青葉区錦町1-13-6エマオ2階E
TEL(022)217-4611　FAX(022)217-6651
愛知［新住所］〒460-0012 名古屋市中区千代田2-19-16 千代田ビル3F
TEL(052)265-7101　FAX(052)265-7132
広島　〒730-0036 広島市中区袋町4-8 CLCブックス2F
TEL(082)546-9036　FAX(082)546-9037
沖縄　〒900-0033 那覇市久米2-25-8　メゾン久米202号
TEL(098)943-9215　FAX(098)943-9216
USA　Ainote International c/o Mr. Takehiko Fujikawa
8010 Phaeton Dr. Oakland, CA94605
TEL(510)568-4939　FAX(510)293-0940

「かざして募金」はスマートフォンからご利用できます。募金は、ソフトバンクモバイル（株）経由となります。詳しくはウエブサイトをご覧ください。

1分間に17人（内12人が子ども）
1日に2万5,000人
1年間では約1,000万人が
飢えのために生命を失っています。

一般財団法人 日本国際飢餓対策機構
2015 6 No.299

飢餓対策ニュース

わたしから始める、世界が変わる

ネパール地震被災者緊急支援を実施中!!
3・8頁に記事と写真

「共に生きる」実践者たち

日本国際飢餓対策機構　常務理事　清家弘久

4月25日にネパールで起こった大地震は、5月12日の大きな余震での犠牲者を含めて（5月19日現在）死者8,700名以上、家屋の倒壊50万戸以上、現在も行方不明者が多数という大災害です。ネパールに住む人々はあまりの恐ろしさに「この国はだめかもしれない」と思ったそうです。4年前に大震災を経験した日本は、すぐに救援の手を差し伸べました。私たちの事務所にもたくさんの方々から支援のお申し出があります。8頁で紹介させていただいた高校生や被災者だった東北の方々からもたくさんの支援をいただいていることは本当に感謝です。他にも「共に生きる」ことを実践してくださっている方々がいらっしゃいます。

JIFHの親善大使森祐理さんは、1995年の阪神・淡路大震災で大学4年生だった弟さんを亡くされました。家族を突然失った喪失感は大きく、心の痛手は計り知れないものがあります。しかし、彼女は亡くなった弟さんに励まされるように瓶ケースをステージ代わりに被災地のあちらこちらに立ち、歌を通して人々を励まし続けました。以来世界各地の被災地に出向き人々を励まし続けておられます。自分の悲しみを悲しみに終わらせることなく、他の人々を励ましていくエネルギーに変えていき、励まされた人がまた他の人を勇気づけていく…。神から与えられた歌声を通して「共に生きる」ことを実践してくださっています。ネパールのためにも祈っておられます。

東日本大震災直後から南三陸の人々にずっと寄り添って活動されてきた中澤牧師。仙台市内から片道90キロの道のりを奥様やお子さんたちと一緒に、今も一週間に2日～3日車を走らせ、仮設に住んでおられる人、家は残ったが仕事を失った人などを励まし続けておられます。2017年に住居の高台移転が完了する予定ですが、住民にとってまだまだ先が見えない苦しみが続いている、との連絡を牧師はくださいます。しかしそんな中にあっても、今回のネパールのことを聞いて、いてもたってもいられず自分たちのできることをと支援金を募っている方がいらっしゃるそうです。牧師の取り組みが、人々の意識を変え、「共に生きる」ことの実践者となっているのです。

今回のネパール大地震の犠牲者の方々に深く哀悼の意をお伝えすると共に、今苦しんでおられる方々には、共に生きようと傍らに立って励ましてくださる方がたくさんいらっしゃることをお伝えします。

「あなた方があった試練はみな人の知らないものではありません。神は真実で正しい方ですからあなた方を耐えられないほどの試練に会わせることはなさいません」（聖書）

コンゴ民主共和国は鉱山資源が豊かな国ですが、現在も国連の人間開発指数で187ヵ国中186位と、世界最貧国の一つです。NL297号（本年4月号）で、ハンズ・オブ・ラブ・コンゴのジェローム・カセバ駐在員より元国内避難民パメラさん（35才）の働きの支援について紹介されました。パメラさん一家は略奪者により一切の財産を失い、お兄さんは殺され、一家も離散、450キロ離れたルブンバシまで避難してきました。そこでJIFHが開いた「VOCセミナー」（地域変革セミナー）に参加して学んだことをきっかけに、以前住んでいた村に近いプエトに戻り、農場プロジェクトを始めたのです。

コンゴ元国内避難民の挑戦！ パメラさんを訪ねて

日本国際飢餓対策機構
特命大使 近藤高史

プエト事務所の前で農場関係者全員が集まって撮影

ルブンバシからプエトまでの道のりを20時間かけバスで移動した後、3人乗りオートバイの背に30分ゆられて、ついにパメラさんたちの農場に着きました。貯蔵庫には、大きな袋3杯のトウモロコシが誇らしげに並んでいました。パメラさんたちが政府から無償で借りている土地は約1万8,400坪あり、まだトウモロコシが主ですが、豆やピーナッツ、カボチャ等の野菜も少しずつ増やしているそうです。またトウモロコシの実を、そのままではなく、いずれは脱穀機を買い、付加価値の高い商品として売ることができたらと話していました。

翌日パメラさんは家畜場を案内してくれました。ジェロームが今年1月にプエトを訪ねた後、柵を作り、約1,200坪の土地で数頭の豚を飼育し始めたようです。近隣に迷惑をかけないよう農場よりも25キロ先にあり、常に3人が交代で家畜場近くに住み込んで、豚の世話をしているそうです。農作物と違い天候に左右されず、より安定した収入を得られる家畜はこれから農作物と同じくらい大切になると話してくれました。

家畜場の柵の前で左端にジェローム駐在員

子どもたちの教育

パメラさんは殺されたお兄さんの娘と自分の子ども4人を奥さんと養育しています。学校に通っているのは一番年長で14才になるお兄さんの娘のミサンギさんのみ。内戦で何年も学校に通えなかったミサンギさんは、小学校5年生のクラスに出席しています。コンゴでは義務教育というものがなく、小学校は月に約500円の授業料を払えば誰でも学ぶことができるそうですが、月謝が滞るとすぐに学校から帰らされるとのことです。パメラさんは子どもたちの教育が大切なことは分かっているが、生活を安定させて収入を得る生活ができないことには、子どもたちが学校を出ても安心して働くことができない。また元の避難民に戻ってしまうと、とても心配していました。

プエト市内の日常風景

パメラさんの心配を、今回私はコンゴをバスで移動する数日の間に、わずかですが体験することができました。内戦後の混乱で道路や水道、電気といったインフラがいまだ崩壊したままで、1度干ばつが起これば、深刻な飢餓が起こりかねない状況です。またこれまで社会が豊かになりかけるに連れて多くの紛争や略奪が起こっていることを考えると、パメラさんの心配は大いに納得させられるものでした。

今回の訪問から、私はコンゴのこれからについてさらに多くの宿題を与えられた気がします。

（報告と写真・近藤高史）

コンゴの人々のためにハンガーゼロサポーター（月千円～）となって応援を！

ネパール大地震・被災者緊急支援、現地にスタッフ派遣

当機構は、4月25日ネパール中部で発生した大地震の被災者救援として直ちに緊急支援を決定し、5月12日から27日まで吉田知基を現地に派遣しました。吉田は、当機構のパートナーである韓国飢餓対策機構（KFHI）の緊急支援チームに合流、物資配布や被害状況の確認などをするとともに、現地で救援活動をするGFA（ゴスペル・フォ・アジア）とも協力、情報収集や調査を続けながら、特に支援の手が遅れている被災者のニーズを探りました。

以下は、現地から送られてきたレポートを抜粋したものです。

【5月16日】KFHIスタッフと共に、今回の地震で最も被害の大きかった（国連難民高等弁務官事務所の被害調査による。死者は3千人以上）シンズパウチョック（Sindhupalchok）を訪問しました。今回配布したものはテント、ハンドソープ、洗濯洗剤、薬など250セットとパンの缶詰80缶です。パンの缶詰は地域の子どもたち向けに配布しました。子どもたちが本当に嬉しそうに食べてくれ、その様子を周りの親たちが優しい眼差しで見つめていました。

パンの缶詰を子どもたちに手渡す（手前吉田）

【5月17日】ヌワコット（Nuwakoto）でGFA（ゴスペル・フォ・アジア）の救援活動に参加。150家族分のお米（一家族30kg）、塩、衛生用品などの配布を手伝いました。その時に、日本から持参した「pray for nepal のメッセージバナー」（ゴールデンウィークに東大阪で行われた催しで集めた寄せ書き※表紙に写真）も掲示したところ、被災された方や地元のボランティアの青年たちに喜ばれました。

配布後、ヌワコットの中でも被災状況のひどかった所を訪ねました。そこでお姉さんを亡くされた男性（8頁に写真）と出会いました。彼のお姉さんは家の倒壊で下敷きとなっているところで発見されたそうです。

昨日、ネパール政府はこの震災で家を失った人に対して15,000ルピー（2万円弱）を支援する発表がありました。しかし被災された方々からは「家を建て直すには全く不十分だ」という落胆や不満の声が聞かれました。

（報告：吉田知基）

◇ ◇ ◇ ◇

当機構は被災された方々に対して、現地ニーズを見極めながら復興支援を続けていきます。引き続き支援くださいますようお願いいたします。なおウエブサイトには最新情報を掲載していますのでご覧ください。（8頁に関連記事）

バヌアツ・サイクロン被災者に支援物資が届けられました

バヌアツに5月1日、大阪からニュージーランド経由でパンの缶詰やローソク等の援助物資が到着しました。滞在していたホテルのオーナーが自分のトラックを貸してくれたので、物資は問題なく積む事ができましたがバヌアツは連日大雨で、道路は水浸しでした。

物資はパンゴ、北エファテ、マンプレイスの郊外の被災者に届けます。マンプレイスの郊外で支援物資配布の拠点となっている教会には、多くの人が詰めかけて物資を受け取り、JIFHにとても感謝していました。みなさんが缶詰の中身に興味を持たれたので、それは日本からのパンが入っていて、すぐに2回目の支援物資も来る、と話すとみな驚いていました。パンゴと北エファテへの配布は洪水で一時足止めをされましたが、天候が回復次第届けます。

日本の皆さんの愛と配慮を感謝いたします。パン、ろうそく、タオル、医薬品を提供してくださった会社に心からお礼申し上げます。

（報告：国際飢餓対策機構ニュージーランド　ジョセフ・リー）

募金は…郵便振替00170-9-68590（一財）日本国際飢餓対策機構「バヌアツ」又は「ネパール」と明記、又はウエブサイトから

元里子のアデリーノが幼稚園を運営

元モザンビーク駐在員がかつての活動地ムササを訪問

1997年から2002年まで日本国際飢餓対策機構の駐在員としてアフリカのモザンビークで活動をした、ローレンス・綾子さん（旧姓：小倉）が14年ぶりに当時の活動地ムササを訪問。そのときの報告が届きました。

子どもたちの成長がより良い社会を築く

▼マンゴツリーキッズ幼稚園の園児はその名のとおりすくすく成長しています▲

ムササ小学校に寄ってみると、山の手ロータリークラブによって寄付された建物に2つの建物が加えられ、たくさんの子どもたちが勉強していました。

そこから私たちは「ある場所」へと向かいました。門を開けると、人々が歌いながら一列に並んで私たちを迎えてくれました。驚いたのは、その当時一緒に動いていた牧師のほとんどに会えたことです。ソロモン牧師は88歳、エルネストさんは95歳なのに自転車で来ていました！再会できたことを

共に心から喜びました。

この「ある場所」とは元里子のアデリーノが運営している「マンゴツリーキッズ」という幼稚園です。もともと建物も何もない所でアデリーノはマンゴの木の下に子どもたちを集め、聖書の学びを始めました。そこから子どもたちが増え、賛同する大人が与えられ、建物が建ち、幼稚園が始まりました。今年でこの幼稚園は12年目を迎え、200人以上の子どもたちが、朝から午後3時半までここで過ごしています。

先生は全員、卒園生！

幼稚園の門を開けて入ったとたんに、そこは違う世界なことがわかりました。そこには希望があり、ワクワク感があり、神様の祝福と守りに包まれているのは誰の目にも明らかでした。しかも驚いたことにそこで教えている先生は、その幼稚園の卒園生たちでした。学校を卒業し、宣教師が経営するトレーニングスクールで訓練を受け、こうして母校で子どもたちを教えているのです。

アデリーノは「すべて里親会で習った聖書の話が僕の基盤なんだよ。受けた祝福を次に与えていくことを教えてくれたのも里親会だ。だから綾子にもFHのスタッフにもすごく感謝しているし、これからも感謝し続けるよ」と言いました。私たちの能力をはるかに超

えたことを成してくださる神を崇めました。

考えさせられた2つのこと

1つは当時住んでいた頃は気付かなかったのですが「里子」になることで、多くの子どもたちが「選ばれた」と感じ、大切な存在だと実感し、それが自信につながっていたことです。今回はアデリーノの

元里子のフェリザルダ㊨

他にもたくさんの元里子に会いました。フェリザルダは、極貧のシングルマザーの元に育ったにもかかわらず、JIFHの奨学金制度によって、大学まで卒業しました。現在は生物学の先生をしています。また自分の家を建築中で、実際に家を見せてくれました。ティアゴ（写真㊤）は、幼少期に病気で片目を失明し、その当時私自身も病院に付き添いました。今はゴロンゴーザ地区の教育委員会で働き、素晴らしい家庭を育んでいます。彼らは逆境に屈せず、被害者意識に病むことなく「頑張れば道は開ける！」と信じて、実際に成功を手にしたのです。

2つ目は「持続性」という言葉の定義についてです。私たちが支援を行う時、外からの支援への依存をさらに強める構造を作らないように極力注意を払います。しかし依存心を強めることを怖がりすぎると、中途半端な関わり合いしか出来ずに、地域に変革をもたらさないままに終わってしまうと感じました。精一杯関わり、持てるものを注ぎだして必要な支援をしっかりとしていく。そして支援が終了した時に、彼らがそれを自分たちで継続していくことが出来るようにします。そこで関わる子どもたちが希望を持ち、人々の祝福となることを願う生き方を選んでいく。そして良い社会が築き上げられていく。これ以上に素晴らしい「持続性」はないのだと感じました。

聖書に「善を行うのに飽いてはいけません。失望せずにいれば、時期が来て、刈り取ることになります。」とあります。私たちは、時としてはなかなか実が見られないと感じたり、思い返しては反省するような瞬間も多々あります。しかし神は私たちの弱さや足りない所を超え豊かに祝福してくださる方です。もと駐在していた地を訪問し、実りを祝う機会を与えてくださったことに心から感謝します。

アジア、アフリカ、南米で支援を待つ子どもが600人以上います。チャイルドサポーターとなって応援してください。最終頁に申込欄。

連載〈1〉

ラテンアメリカの人々とともに

変わるものと変わらないもの

ボリビア多民族国
駐在　小西小百合

中南米とカリブ海の計27ヵ国の地域を総称してラテンアメリカといいますが、私はラテンアメリカの3ヵ国に駐在して計15年と4ヵ月、現在の南米・ボリビア多民族国では8年4ヵ月になります。

ラテンの人々の一般的なイメージというと“陽気な気質”“カーニバルなどお祭り好き”“細かいことは気にしない”“時間にルーズな一面を持つ”などが挙げられるでしょう。また欧米に比べると“貧しい国々が多く犯罪が多発”というイメージが強いかもしれません。今回から数回に渡り、長年これらの国々に住み活動している者の視点でラテンアメリカとボリビアの現状と課題について考えていきたいと思います。

増加し続ける凶悪犯罪

現在ラテンアメリカには、ボリビアも含めて誘拐・人身売買や臓器売買（密売）、DV（家庭内暴力）、麻薬製造と密売、人種（民族）差別、女性差別、児童労働その他多くの問題が存在しています。ここ3～5年の間に私が特に危機感を覚えているのは、ラテンアメリカにおける凶悪犯罪の増加です。例えばここボリビアにいても信じがたいような凶悪犯罪のニュースが“毎日のように”ではなく、まさに“毎日”、“新たに何件も”そして“日常茶飯事”のように都市部でも田舎でも数多く報道されているのです。特に目を覆いたくなるような女性や子どもへの常軌を逸した暴力や虐待、殺人事件などのニュースが日々テレビから流れてきて、とても心が痛みます。

これらのさまざまな問題の根底には貧困があり、それが人々に重くのしかかってすさんだ思いにさせ、このような残虐な行動に駆り立てているのだと感じています。このような「心の飢餓」や貧困を解決していくためにどのように協力していくのかが私たちの課題でもあります。

表向きの改善

ラテンアメリカは古くから男尊女卑（マチズモ）が深く根ざしてきた社会。現在はそれぞれの国で“男女平等”“女性の権利拡大”を政府の方針の一つとして打ち出し、“女性を守る法律・社会システムの構築”を進めており、公には女性が生きやすい社会になりつつあると謳っています。しかしたとえ法律や制度が制定され改善されたとしても、人の心から悪い思いが無くならない限り、そして神への畏敬の念と隣人の尊厳を尊重する心を持たない限り、社会が良くなることはないと痛感させられています。

次回はまずこれらの実態と現状について触れてみたいと思います。

「人の心は何よりも陰険で、それは直らない。だれが、それを知ることができよう」

聖書

私から始めます
支援者の取り組み

東日本大震災被災地に思いを寄せて

金城学院高等学校

東日本大震災から4年が経過しましたが、今も多くの方々が被災地を思い自分にできることを模索し続けています。今回はその中で金城学院高等学校（愛知県名古屋市）の生徒さんたちの取り組みをご紹介します。

同校では生徒の発案で、「ものづくり」を通して支援活動を続けてきました。震災発生直後は、生徒会執行部での話し合いで5月の母の日に合わせて手作りのペーパーカーネーションを被災地に贈ることを決定。基督兄弟団石巻キリスト教会を通して、被災された方々に届けられました。同年夏には、被災地でエアコンが不足していることを知った生徒たちは、メッセージ入り団扇の贈呈を企画・実施。以降も生徒会執行部の呼びかけにより、文化祭で生徒たちが作成した小物を販売し、売上げを被災地への義捐金として当機構に寄せてくださっています。また毎年3月11日前後の数日間は、登下校の時間帯に生徒たちが校門で募金を呼びかけています。

校門での募金活動

東北への思いを込めて作成した小物類

なぜ「ものづくり」か

今年4月に義捐金を携えて当機構愛知事務所を訪問してくださった生徒さんからに伺ったところ、「私たちは被災地に行くことができないので、せめて手作りのものに心を込めたい」「お小遣いを寄付して終わりではなく自分たちでできることを考え、手間暇かけることで被災地への思いを深めたい」と答えてくれました。「ものづくり」に参加した生徒たちも「被災された皆さんの励ましになるように」と放課後教室に集まり、作成を楽しんだとのことでした。

今年3月13日には同校の特別礼拝で被災地のための祈りが捧げられ、生徒代表が宮城県を訪問した報告と募金の呼びかけをしました。そして3つの感謝について語りました。1つ目は、「ここに立って、ここで話せること」への感謝。2つ目は「多くの方々の温かい気持ちから、被災地が確かに復興に向かっていること」への感謝。そして3つ目は「私たちの支援を、そのまま受け入れてくださる被災された方々」への感謝でした。

今生かされていることに感謝しつつ、今いる場所での支援を温かく受けとめる人がいてこそのつながりであることを発見した金城学院の生徒たちは、今年も支援を続けます。

心に寄り添う支援を

生徒会長　筒井愛理

東日本大震災から4年が過ぎた今、被災地は確かに復興へと進んでいます。しかし本当の意味での復興“心の支援”はこれからももっと力を入れていかなければならないことだと感じました。金城生みんなで被災者の方々の現状を共有し、「心に寄り添う」という気持ちを大切に支援を続けたいと思います。

つながりからの支援

前生徒会長　加藤江梨花
同副会長　船戸優貴

私たちが支援の中で大切にしてきたこと、それは「つながり」です。宮城訪問で様々な方と出会って新しいことを知り、金城生だからこそできる支援とは何かを考えてきました。そしてモノだけではなく、想いを、愛を、届けたい！その一心で活動してきました。その一つとして「ものづくり」という企画を行いました。ティッシュボックスケースやアクリルたわし、ヘアゴムなどをみんなで手作りし、文化祭のバザーで販売して売り上げを義捐金として送っています。

他にも、募金活動や宮城学院との交流会、救缶鳥プロジェクトなど、様々な活動をさせて頂きました。そこから得られた想いや経験がこれからの被災地支援につながっていくことを願っています。

愛知事務所を訪問してくれた生徒会のみなさん。
前列右から顧問の伊藤先生、生徒会長の筒井さん。

「わたしから始める、世界が変わる」支援イベント等を開催してみませんか？　お気軽に各事務所にお問い合わせ下さい